

学位論文の要約

題目：精神科学的「手続き」としてのガダマー解釈学——事柄・弁証法・適用

氏名：下山千遥

本論文各章で行なったのは以下である。

第1章の検討を通じて明らかになったのは、ガダマーにおける精神科学論が、単なる方法論批判や学問的独立の主張ではなく、理解の出来事性そのものを哲学的に再構成する試みであるという点である。ディルタイに対するガダマーの批判は、方法主義の否定というよりも、理解を「無限の課題」としてではなく「無限の対話」として捉え直す方向で展開された。すなわち、理解を客観的真理への到達過程としてではなく、終わりなき対話の出来事として把握することによって、ガダマーは「生の究め難さ」を出来事としての理解の運動に転化させたのである。

一方で、新カント派、特にナトルプとの対決において、ガダマーは「超越論的自我極」による歴史の超克を批判し、むしろ人間の有限性と歴史拘束性を積極的契機として引き受ける立場を提示した。「問題史」的歴史理解に潜む脱歴史的傾向を克服し、伝統の内に生きる主体が「事柄」への問いを通じて自己理解を更新するという動的構造、この構造こそ、後のWMで展開される「作用史的意識」および「地平融合」の理論的基盤となるものである。

したがって、ガダマーの精神科学論の核心は、ディルタイの「生」概念と新カント派の「主観性」概念のいずれをも継承しつつ、両者の限界を乗り越える形で「理解の出来事性」を哲学的に定立する点にある。第1章での検討は、次章以降で論じる「適用（Anwendung / Applikation）」および「事柄」概念の展開に向けた思想的基盤を整えることができた。

第2章では、ガダマーの「適用」概念を、理解現象における方向づけの分析を通して検討した。まずローティによるガダマー解釈を起点として、理解の運動が〈対話の継続〉として把握される可能性を確認した。理解は決して完成し終結するものではなく、常に他者や伝統との応答関係のうちで新たに生成されるというガダマー解釈学の動態的性格を、明示的に詳述するに至った。他方で、Warnke（1987）による批判を経由して、理解の過程が「事柄（Sache）」という普遍的契機に向けられていること、すなわち〈事柄への志向〉が理解のもう一つの方角づけであることが示された。

これら二つの方向づけ——〈対話の継続〉と〈事柄への志向〉——は、相互に緊張関係を孕みながらも、「適用」概念のもとで調停されることが確認された。ガダマーはアリストテレスの「フロネーシス」を媒介として、特殊と普遍の相互循環的構造に基づく理解のあり方を提示した。ここで「適用」は、単に一般的原理を個別の事例に当てはめる手続きではなく、むしろ個別的状況における判断を通じて普遍が新たに構成される契機として理解される。さらに、1963年論文における「自然法」の可塑性の議論を参照することで、ガダマーが「適

用」における正当性を、歴史的・有限的条件性のうちに見出していることが明らかになった。

以上の検討を通して、「適用」は、理解主体の歴史拘束性と「事柄」の普遍的志向性とを媒介し、両者を相互に生成的關係へと開く実践的契機であることが示された。したがって、「適用」は、単なる解釈の最終段階ではなく、理解そのものを駆動する中核的原理として位置づけられることを示した。

第3章では、ガダマー解釈学における「地平融合」概念を、ヘーゲル弁証法の影響のもとで再考し、その構造的基盤を明らかにした。「地平融合」は理解現象の各段階を包摂して表す概念であるが、地平融合が進行していく各段階でのその都度の理解の暫定的確定は、「適用」でもって表されている。ガダマーは、ヘーゲルの弁証法に見られる否定と生成の運動を、思惟の体系的展開としてではなく、言語的出来事としての「理解」の運動として再構成した。ここにおいて弁証法は、統一への収束ではなく、他者性を内包したままの往還の運動として開かれ続ける。言い換えれば、ヘーゲルにおける「絶対精神」の自己展開が、ガダマーにおいては「対話」や「言語」における生成的過程として解釈し直されているのである。この再解釈により、ガダマーはヘーゲルの思考の核心にある「止揚 (Aufhebung)」を、有限的存在としての人間の理解行為のうちに移し替えたことを明らかにした。ハイデガーが「存在の忘却」を批判しつつも存在を沈黙のうちにとどめたのに対し、ガダマーは「語ること」と「聞くこと」の往還において、存在が常に言語的に現前し続ける可能性を見出した。したがって、「地平融合」とは、主観と客観の統一ではなく、対話の過程で互いに変容し続ける地平の生成運動である。

ガダマーにおいて弁証法は、もはや観念論的自己展開の論理ではなく、歴史のうちで生起する言語的出来事としての「理解の運動」である。このことは第4章においての、相対主義や有限性の問題に対して単に消極的な応答のみ行うのでない、精神科学の独自のあり方とはいかなるものか、また解釈学がいかに精神科学の基盤としての役割を持ちうるのかという検討へと接続していった。

第4章の考察を通じて明らかになったのは、ガダマーにおける「適用」が単なる理解の補助概念ではなく、精神科学の「手続き」そのものを構成する概念であるという点である。ガダマーは、近代科学が「確実性 (Gewißheit)」をその尺度として発展してきたことを認めつつも、精神科学における真理探究を同様の基準で測ることの不可能性を明示した。精神科学は、対象を普遍的法則の事例としてではなく、個別的・歴史的な「事柄 (Sache)」として理解することを目指す。この理解の過程において、「適用」は、解釈者がテキストの意味を自己の歴史的状況において問い直し、そこから新たな理解を生成する契機として機能する。

また、「適用」は、「完全性の先行把握」という前提を通じて、理解における「尺度」を都度形成する理解の営みに接続されている。すなわち、解釈者はテキストが意味の完全な統一を成しているという「先入見」のもとで理解を開始し、その過程で「問い」と「答え」の応答的運動を通じて、把握し得る「完全性」の内容を都度組み直す。この循環的過程において、

「適用」は精神科学の営みにおける理解の暫定的確定の瞬間として現れ、真理探究を支える動的契機となる。

したがって、ガダマー解釈学の核心は、「方法」を欠いた曖昧な学問像にあるのではなく、「適用」を必然的契機として含む「手続き」を通じて、理解がいかに可能となるかを実践的に示すところにある。第4章の結論は、「適用」が精神科学の自立的な真理概念を支える構造原理であり、自然科学的「方法」に代わる学問的妥当性の根拠を与えるものである、という点にある。ガダマー解釈学における理解の循環とは、この「適用」の契機が連続することによって維持される精神科学の自己展開の運動にほかならない。

本論文の意義は、ガダマー解釈学を研究対象として扱うにあたって、しばしば軽視されがちである、精神科学の営みのあり方を記述しているというガダマー解釈学の側面を照射し、さまざまな要素が絡み合い、ともすれば相反する主張を調停しないままに並列してしまっているとも思われかねないガダマー解釈学体系を、一つの統一的理論によって読み直すということに一定の成功を取めている点にある。

またガダマーに関する内在的研究の枠を超え、現代日本における人文学・人文科学、さらには質的研究と呼ばれる諸領域における方法論論争に対して有効な理論的提案を行いうる基盤を構築することができた。